

沖繩平和祈願慰霊

大行進に参加して

四万十町 渡辺 恵子

沖繩平和祈願慰霊大行進に参加して二回目になります。

母（92歳）の「今年も行ってみたい」と言う思いをくみ取り、この三月に退職した妹と三人で参加することが出来ました。

沖繩に着いた六月二十二日が梅雨明け宣言をした日で、日差しが強く、どこまでも青空が広がっていました。

沖繩には以前五回ぐらい観光で訪れ、来る度に発展し続けている様子には目を見はります。

うっそうと茂っていた、原野、サトウキビ畑の跡地には高層マンションがいくつも立ち並び、高速道路が本島の縦横に延びていて、「沖繩は車社会だからね。」

と言ったタクシーの運転手さんの言葉にうなずきながら、喧噪の中で「すごいなあ。」とつぶやいたことでした。

変貌を遂げた沖繩県ですが、七十二年前の沖繩戦に目を向けると、鳥肌が立つくらい恐怖を感じます。

糸満から摩文仁の丘に向けて逃げまどうお年寄りや、赤ちゃんを背負ったお母さん、小さな子どもたちの姿をすぐそばで見ている様な気がして、慰霊大行進に参列したのです。

相当な距離を歩くことは覚悟の上で、二ヶ月前から五キロを目途にしてウォーキングをしていました。

気温が三十四度まで上がるとひとりのに汗が噴き出て、着ていたシャツブラウスが汗でびっしょりとぬれるのを感じました。「たまらない。」と思いつつも、途中の休憩所で冷たい麦茶やバナナを貰って元気が出ましたが、急な傾斜にさしかかったところで足がもつれて歩けなく

なり、残念ながらリタイヤせざるをえませんでした。

母はすでに現地に着いており、妹だけが八・五キロを完歩することができて、『思い出になった。』と大変うれしそうでした。

降ってくるような蝉の鳴き声を聞きながら、二十五万人余りの戦没者の御霊に慰霊を捧げていると、戦争で亡くなった人々の悲しい声が聞こえてきそうに思わず胸が苦しくなりました。

二度と戦争をしてはならない。語り継ぐ声を風化させないようにと強く思いました。

※平成29年10月高知県遺族会報掲載